

和漢古典学におけるオントロジ・モデルの構想

相田 満

国文学研究資料館

オントロジという言葉が注目を浴びている。これは、情報の分類のために、あるがままの文化資源を再構築しようとするものであるが、日本や中国など漢字文化圏の世界にも、こうした資源は多量に存在する。

しかし、情報資源となるべきこの種の資料自体についての研究は、非常に数が少なかった。しかも、研究を行うに際しての、意義も十分に認識されているとはいえない。そこで、本研究では、文学研究者の立場から、オントロジという観点の可能性を模索する。

Design of the ontology model in Wakan classical study

ADAM TSURU

NUL

The word "ontology" is capturing the spotlight. Although this tends to reconstruct cultural unvarnished resources for an informational classification, such resources exist also in the world of the Chinese character cultural spheres, such as Japan and China, so much. However, the research about this kind that should serve as information resources of the data itself had very few numbers. And the meaning with is also hard to be referred to as fully being recognized. Then, in this research, it gropes for the possibility of the viewpoint of ontology from the position of a literary researcher.

1. 21世紀の大問題¹⁾

21世紀……、情報過多の状況を打開する切り札的存在であった電子情報化技術も、逆に情報の増殖と多様化を助長せしめる結果をもたらしてしまったと言えるかもしれない。それまでの「いかにテキストを作成・構築するか」というパラダイムから、「すでにある情報からいかに有用な情報を汲み取るか」という段階へと移行してきたということは、衆目の一致する所である。

博学の度合いや情報価値の正当性を問う時、「辞書にない」「教科書にない」という言葉がよく使われてきた。しかし、新たに生み出される情報群の大半が電子化情報へとシフトしつつある状況では、ネットを通してアクセス可能なサイバースペースにおける情報の存在も無視できず、むしろ日常生活レベルにおける資源・評価的価値の比重は逆転の方向に向かいつつある。

ところが、Webの検索エンジンを使用している結果に差異が見られるように、(甚だしいときは、同一エンジンを使用してもアクセスするサイトが異なると、違う結果が返ることもある)あふれかえる情報を、いかにして組織化し、有用な検索手段を以て利用するかという問題は、増殖の一途を

たどる情報群に対して、その効果的な運用のための基盤資源の不足のために、十分な方途を見いだせないままである。

その根底には、「人間の認識系の変容と分類」にいかに対処するかという大問題が横たわっており、多様化するメディア群と、それらを情報として管理するための新たなパラダイムの導入は氾濫する情報群に対して、緊急性を以て求められているのである。

たとえば、人間の認識系に関わる所では、マルチメディアと、そこにおけるハイパertext（メディア）構造は、人間の認識系に変容をもたらすと言われているが²⁾、その根底には常に「分類」という視点が必要であることは疑いを容れないであろう。

2. 古典的な「情報過多の問題」

もっとも、情報過多を嘆くという言説は、漢字文化圏においても、すでに二千年以上も前から存在³⁾していた。そのため、こうした問題解決の取り組みも比較的早くから行われ、情報集積、整理とともに、分類作業が、国家的規模により、有史以来、幾度となく繰り返されてきたのである。

この種の営みは、また一方で、個人的なレベルにおいてもなされていた。

それは、概念化という行為が、作文という文芸活動と不可分の関係にあったことに由来していたからとも言える。すなわち、「詩語・詩題の案出（佳語の発見）」という創作行為そのものが、情報学的立場から見れば「分類語の創出」という行為に他ならなかったのである。こうした土壌により、現代で言う所の「情報資源の蓄積と整理」という行為が、知識階層の日常的趣味である文芸行為自体と親近的な感覚で受け止められ、二千年以上もの継承関係を保ってきたのであった。

3. オントロジ

こうした状況下、近年、「オントロジモデル」ということが注目を浴びつつある。

「オントロジ」とは、「存在論」とも訳されようが、これは1980年代半ばの第五世代コンピュータ開発プロジェクトの頃に提唱され、近年再び脚光を浴びつつある概念である。端的に言えば、「すでに存在する知識体系を分類・集約し、その成果をコンピュータを利用することによって人間科学に反映させる」とでもまとめられようか。

この概念の名称自体は、文学研究においては「オントロギ」という用例の方が熟していたようだが、いずれも原義に則した「存在論」あるいは、事象の「底流」「(心理学的・社会的) 基盤」の意味で使用されるものである。

一方、情報学的見地からは、オントロジは、用語モデルにおける知識構造として捉え直され、現在、用語の標準化による知識共有の基盤技術として、その重要性が再評価されつつある。

その背景の一端には、知識という一般の命題を直接考察の対象にした知識工学が行き詰まり感を持ち始めたという認識が生まれたきたことがある。

オントロジ的とらえ方では知識を構成する基本概念に立ち戻っての考察が行われることに特徴がある。すなわち、知識の階層性、コンテキスト依存性、知識の分解可能性などを注意深く考察することによって、物事や対象の成り立ちを基本から検討し、知識ベースが持つ様々な問題を回避する

ことの糸口を与えることが期待されるのである。

そうしたコンセプトは、具体的には、情報検索に際して、それぞれの知識構造に沿ったシソーラス辞書群を基に、ユーザ個別の要求、すなわち"個"に特化した、最も目的に適った検索や知識の発見（データマイニング）を求めるという考え方への転換となって反映されつつある。

オントロジモデルでは、さまざまなレベルの概念カテゴリー間の相互関係を示したものが使われる。よく使われるのは、「すべての概念の集合」を木の根に見立て、そこから特定の性質を持った概念の集合を代々枝分れさせていくもので、概念木ともよばれる。

これは、知識構造をモデル化したものともいえる。知識構造はカテゴリ単位に分類され、カテゴリには分野別に分類された概念階層の木(ツリー)が複数存在する。シソーラスにおける概念階層木は、ある概念を表す用語の上位・下位概念を表す用語へのリンクから構成され、各概念は概念名、同義語、意味を定義する述語論理によって定義される構造を基本としている。

こうした知識構造モデルの構築は、「人間」というものの認知構造の仕組みを「一般性」普遍的に捉えることを究極目的とすることの観点から、これまで「汎用性」ということを重視して進められてきた。

もっとも、「汎用性」「一般性」という定義自体、極めて相対的なもので、そもそも「日本語」という括り自体も我々からすれば大きな括りに見えるが、国際的には極めて局所的な存在とならざるを得ないものである。

しかし、我々が歴史的、文化的に培ってきた概念の豊かさは、そうした局所的な集合の中にも膨大に存在する。しかも、限られた分野における概念体系にこそ、情報爆発の被害を免れた、確度の高い情報が保全されているものである。その意味で、量に圧倒された傷を受けることなく構築が果たされた、分類体系という情報資源というものは極めて貴重である。

4. 文学研究に「オントロジ」概念を導入する理由 —「類」の観点から—

先述のごとく、「分類」という行為、すなわちものごとを「類」という概念で整理・体系化することは、和漢の古典学世界では基本的な学問態度であった。独自の新しい学問世界を打ち出す以前に、博学多識を旨とする過去の知識の集成が行われることが重んじられ、そうした態度こそ、学問と考える意識の方が強い傾向を持っていたのである。

この点に関しては既に春秋末の孔子が、「述べて作らず、信じて古を好む」態度で以て、「故きを温ねて新しきを知る、以て師と為す可し」（『論語』為政篇）とまで言っているが、こうした態度は、古典世界のみならず、歴史学ほか現代にも通底することであろう。

しかし、自己の思索に基づく独自の創造的思考を提示するのが真の学問である、との明白な認識を表示した人物としては、宗教分野を別としては、中国では恐らくは清代考証学、日本では近世国学の台頭までを待たねばならぬかもしれない。

「類」するものを集積することによって、物事を分類・整理することは、特に中国人に好まれた手法である。日本も漢字文化の移入に伴い、その認識の枠組みを多く取り入れてきた。

その際、認識の枠組みとして、同質のものをまとめるという「類」の概念が利用され、「類」としてまとめられた概念群を他と弁別するために名称（ラベル）も付与され、その結果、分類する行為が物の体系化を促し、その対象は世界に及ぶこととなり、ついに世界は認識可能な枠組みで再構成されるに至るのである。

5. 「類書」ということ

こうして概念群が当時の世界を通観する見地にまで及んだとき、いわゆる「類書」というものが生まれる。

類書は一般に、事物や事象に関する記事を既存の書物の中から抜きだし、これをいくつかの部門や項目に分類する手順で編纂される。そのため、部門や項目立て、さらにはその配列順序、そして分類のための概念語に類書の特徴が現れ、記事の内容自体を編纂者自らが執筆することは稀である。

類書に記載される記事は、多数の書物から抜き出される。その抄出方法には、任意の記事を目的（分類項目）に沿って書き出す方法と、それぞれの書物を一書、あるいは必要な記事の集中する部分に対して、分類概念ごとに分解・再配置を行うという方法がある。後者の編纂方法は、大規模な編纂作業に見受けられる方法で、明代に成立した類書『永楽大典』（二万三千巻、残存八百八十巻）では、そうした編纂手法のおかげで、逆に亡逸した典籍の復元が可能となった（『四庫全書』永楽大典輯佚書）^{*4}。また、類書ではないが、日本では鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』^{*5}、『源氏物語』注釈書の『河海抄』^{*6}などでも、類似の編纂手法が確認できる。

6. 古典的「類書」観とは

「類書」は、ものごとを類概念で体系化した古典的百科事典である。中国の研究者はこれを現代的に訳して「古代の百科全書」と宛てることもあるが、現在一般に使用される「類書」の概念は、多分に近代的意味づけが付与されて使用されていることには留意しなくてはならない。

俗に三大類書と呼ばれるものがある。それに『芸文類聚』（唐・欧陽詢等撰）、『初学記』（唐・徐堅等撰）、『太平御覧』（北宋・李^{りほう}等撰）を宛てるのは、中国最大の書籍解題書である清朝の『四庫全書総目提要』（巻135 子部類書類1）によるが、現在でもこの三書がもっとも類書の典型的形態を得たものと考えられている。

しかし、かかる評価を得ているにもかかわらず、「類書」という名称が定着するのは存外に遅く、中国では宋代、日本ではさらに下って江戸時代のようにである。

最初の「類書」の称号を得たものに魏の文帝時代に劉^{りゅうしょう}等が勅を奉じて撰した『皇覧』（もと1000余編）と言われるが、その評価とても『四庫全書総目提要』に依る所が大きい。

それでは、類書はどのように呼ばれていたかという点、おおむね雑書・俗書・雑俗書等に扱われ、図書分類上でその位置を占めるようになったのは、『隋書』経籍志の「雑家」、旧唐書』経籍志の「類事」を経て、『崇文総目』（欧陽脩）子部や『新唐

書』芸文志の「類書類」まで待たねばならない。したがって、中国において「類書」なる名称が一般化するの、北宋の仁宗の康定～嘉祐年間（1040～1060）と想像される。

一方、先に日本における「類書」の名称の定着を、江戸期と述べたものの、厳密に言えばやや曖昧とした点も残る。その理由の一つに、中国における「類書」概念の定着を見ていることと、日本的な「類書」観が現れる言説も散見されるからである。

たとえば、二酉洞^{にゆうどう}（前田菊叢）による元禄 12 年（1699）版『唐本類書考』や、向榮堂（山田三郎兵衛）の寛延四年（1751）版『唐本類書考』で扱われる書目には、『漢魏叢書』や『康熙字典』のような叢書・辞書の類の方がかえって多い。また、宝暦 3 年（1753）から安永 9 年（1780）にわたって書き継がれた山岡浚明『類聚名物考』では「類書」は、「類叢」という見出しが立てられ、そこでは、

「されども皇覧の如きは一事にもあらず。類ひをもて小部なる物を寄集めし叢書の初なるへし。され共よつて来る所を是をや初とすへからん。皇朝にては類聚国史・新撰字鏡のときを始とやいふへからんかし。」⁷⁾

と、類書の嚆矢とされる『皇覧』を「叢書」の初めとし、日本では『類聚国史』『新撰字鏡』をその濫觴に据えている次第である。

さらに同じ項目には、

万安方・姓氏録・薰聚類集・藻塩草・呉竹集・春雨錦・兼名苑・名目抄・二人凡秘抄・十語五草・宗般聞書・堯孝法印日記・裁縫秘抄・庖丁譜・厨事類記

などが挙げられ、現代的観点からすれば、注釈書・日記、作文手引き書、辞書、入門書などに扱われる書名が「類叢」の書として挙がっていることが注目される。

こうした認識は、現在の考え方からすれば意外の観を以て受け止められがちだが、そもそも多量の情報資源を「聚^{あつ}めて分「類」する行為自体を重視する立場に立てば、様々な形式でまとめられる人間の思考活動の本義に適った正当な見解と言える。そして、和漢古典学におけるオントロジモデルを構築する際の対象も、こうした知識集約型

の典籍を俎上に挙げてしかるべきである。

7. 近代的「類書」観とその解体

かかる段階にまで考察を進めて来ると、「類書」という概念に代わる言葉を持ってないことに気づかされる。

そもそも、近年の研究で「類書」なるものが注目されたのは、それが一つの「工具書」として、古来より様々な方面で利用されてきたことが文学・史学の研究過程で明らかにされてきたことによる。とりわけ、通覧的機能の期待されない簡便な典籍類が、上代・平安より文学的営みと密接に関わってきたことが明らかにされたことは、文学研究における「出典」と「典拠」というものの概念を変える大きな出来事として、専門分野により 10 年以上の時差をとめないながらも、その後の研究方法を大幅に変えた。

しかし、そうした典拠たるものの存在自体の研究と、資料整備や解析、さらには基盤資源の提示は遅々として進まず、十年一日どころか、百年一日とも言ってもよい状況にあり、それどころか、かかる状況で再認識された「類書」観が、先に述べた三大類書こそが「類書」であるといった、規範的な「類書」モデルを生み、「類聚」という観点で集められた多様な編纂物を、「分類」という観点から、同じ地平上に据えて分類する作業の障害ともなってきたのである。

したがって、我々はこうした「分類」という観点から古典学を見つめ直すためにも、多義的な「類書」という言葉、あるいは「辞書」「百科事典」などと言った、まとめあがった形式にとらわれない、人間の知的行為や認識にのっとった、新たなパラダイムを模索しなければならないだろう。本発表で使用した「オントロジ」という概念を採用したのは、そうしたこれまでの桎梏から抜け出せる一つの可能性が孕まれていると感じるからである。そして、「オントロジ」の取材源となる、分類概念で内容が整理された典籍類を「(知識型)類聚編産物」と呼称することとしたい。

8. 和漢古典学のオントロジの収集

「類書」「辞書」「字典」「百科全書」、そして

用語における「オントロジ」のいずれもが、「世界の認識と記述」を志向するとは、よく言われることである。

記述の対象は、自然界・人間界の全領域（思想・制度・行為）に及び、たとえば、「類書」では、「天象」「人事」「神仏」「山地」「禽獣」「草木」……などといった配列ともに階層かが図られる。

また一方、これらとは別の観点で、配列基準を有限個に設定し、その原則でもって世界を記述するものも存在した。その規則として代表的なものとしては、「部首」・「韻（漢字音・五十音）」、あるいは独自に設定され、親しまれてきた規則、たとえば「いろは」「千字文」「アルファベット」などである。これらも、配列原則に世界認識が意義付けられ、「円環知⁸⁾」などという名称も使われている。

一般的には、前者の配列方法に比べ、後者のような有限個の配列規則を設定する方法登場は遅れるが、それは「文字文化」というものの浸透に由来するようである。しかし、後者の方法においても、配列された見出し語の属性に、前者に見えるような階層的知識体系の樹形図が埋め込まれているものがほとんどではある。また、両者の関係を現代的にたとえれば、「目次」と「索引」との関係にもたとえられよう。

いずれにしても、配列規則・属性（分類概念）、さらには概念観を接続する関係といった規則は、歴史的に見ても多様に存在する。

このような世界に、「オントロジ」という情報学的見地から再構築が試みられつつある現在、和漢の古典学研究においても、新たな観点と意義が拓かれることを感じるとともに、そのための取り

組みがなされるべきことを痛感せざるを得ない。その第一歩として、和漢古典学のオントロジの収集と分析、そしてそのための理論モデルの構築は、まずなされるべきことであろう。

その一例として、現在進めている取り組みの中から、分析を試みたい。

9.材料と方法

現在、稿者は、それぞれの担当者の関心の基に、類聚編纂物の分類用見出し語彙のデータを、上下の階層関係を保全したままの形で、協同で入力作業（一部収集もあり）を進めている。

入力される類聚編纂物の形態には、さまざまなバリエーションがあるため、データフォーマットについては、なるべく入力しやすく、簡単な構造がとれるようにつとめ、分類語の出現頻度などの総合的な分析については、データ集積後に改めてデータベース化のための処理を行なうこととした。

現時点での入力済データは〔図①〕以下の通り。

古事類苑・北堂書鈔・事類賦・初学記・芸文類聚・李?百詠・万葉集・書言故事・百科全書（ディドロ、ダランベール編）・不忍文庫改正目録・四庫全書・日本館訳語・和漢書籍目録・増補書籍目録作者付大意・増補書籍目録・古今書籍目録・改正広益書籍目録・広益書籍目録・現代短歌辞典・王朝語辞典・醒睡抄・羅山文集・鷺峰文集・藻塩草・伊京集・慶長五年本節用集・元和三年板下学集・書言俗解・書言故事・俳諧類船集・和漢朗詠集・日本十進分類表（新訂第八版）・漢書芸文志（七略）・（七録）・隋書經籍志・舊唐書經籍志（古今書録）・新唐書芸文志・崇文總目・郡齋讀書志・直齋書錄解題・文献通考經籍考・和漢朗詠集・日本分類語彙表（旧版）・職原抄・百寮訓要抄〔順不同〕

個々のタイトルにおける階層はそれほど深くはなく、2～3階層で事足りるものがほとんどである。

地域・時代	撰者	書名	巻数	部名	部よみ	次第名	門序	門名	門よみ	門序	目名	目よみ	目序	細目	細目よみ	細目序	備考
中国・唐	徐堅等	初学記	第一巻	天	てん	部	上	天	てん	一							
中国・唐	徐堅等	初学記	第一巻	天	てん	部	上	日	ひ	二							
中国・唐	徐堅等	初学記	第一巻	天	てん	部	上	月	つき	三							
中国・唐	徐堅等	初学記	第一巻	天	てん	部	上	星	ほし	四							
中国・唐	徐堅等	初学記	第一巻	天	てん	部	上	雲	くも	五							
中国・唐	徐堅等	初学記	第一巻	天	てん	部	上	風	かぜ	六							
中国・唐	徐堅等	初学記	第一巻	天	てん	部	上	雷	かみなり	七							
中国・唐	徐堅等	初学記	第二巻	天	てん	部	下	雨	あめ	一							
中国・唐	徐堅等	初学記	第二巻	天	てん	部	下	雪	ゆき	二							

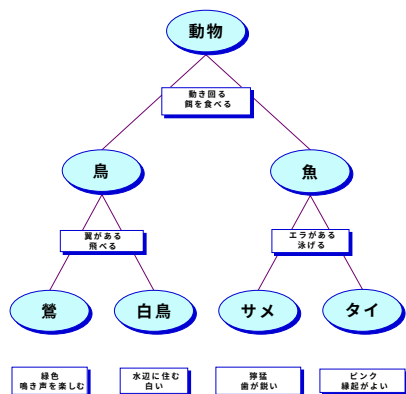
〔図①〕 入力の一例（『初学記』）

類聚編纂物に使用される分類用語彙群は、上位一下位の階層的構造をなし、認知科学で言うところの古典的モデルである「意味ネットワーク・モデル」を形成している。⁹⁾ この構造では、概念は

ろの古典的モデルである「意味ネットワーク・モデル」を形成している。⁹⁾ この構造では、概念は

「節点（ノード）」で表わされ、そこに各々の特性が蓄えられる。

概念同士は、それらの関係を示すリンクによって結合されるが、ノードの定義には、様々な可能性が考えられる。稿者は、それ自体も「あるがまま」のオントロジの収集、すなわち、古典的類聚編産物の中から取材することを構想したい。



〔図②〕 意味ネットワーク

10. 類聚編産物間の分類概念の比較例

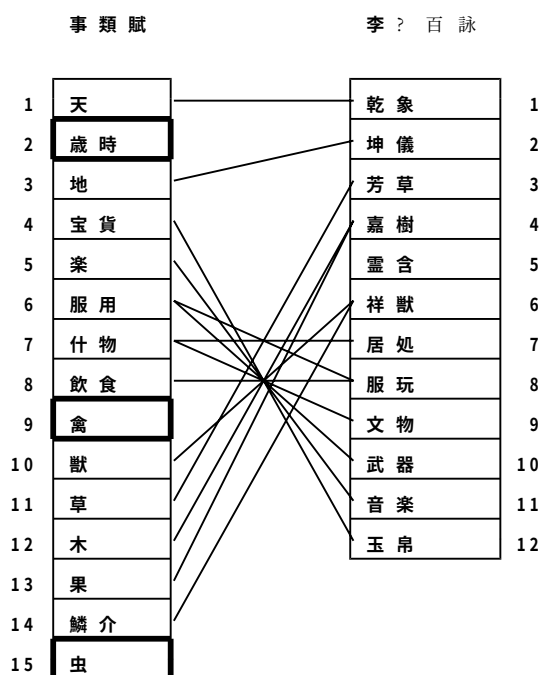
古典的類聚編纂物の宋代類書『事類賦』（呉叔・撰）と幼学書としても親しまれ、日本文学における影響の甚大な唐代初期の類書『初学記』について、その島の比較が行なえるよう標示を試みたものの一部である。

掲示の図は、中央部が下位概念、周縁部が上位概念として配置し、それぞれ概念語が一致するものについて、比較が視覚的にできるよう、一致するものを線で繋いで示したものである。（太線で囲んだセルは、一致しないものを示す。）

こうした手法で表現すると、影響関係の疎密の分布状況を視覚化して示しやすいが、こうした表現を簡便に行うツールがなく、その登場が期待される。

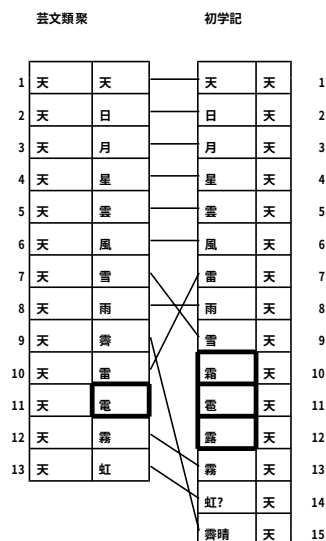
また、〔図④〕は、同様の手法で、下位概念の一致する部分の表示を省略し、上位概念語のみで関係の有無を図示したものである。

このような表示に改めると、下位に階層に一致する語句が存在すると、上位概念も類縁関係が存在することが分かりやすいであろう。



〔図③〕 概念間の分析

比較を行ったものは、前掲の『事類賦』と、同じく日本文学における影響の甚大な唐代初期の詩集『李? 百詠』である。紙幅の関係で詳細は別稿を予定したいが、この図を以て見れば、『李? 百詠』『初学記』『事類賦』の三者の世界観に強い類縁関係が存在し、しかも「類書」と「詩集」というジャンルを超えた視点での分析が必要なことも了解されるであろう。



〔図④〕 上位概念の比較

11. 現代と古典の比較例

今度は、視点を変えて、唐代類書『芸文類聚』と、現代の『分類語彙表』（国立国語研究所編、秀英出版、1964.3 初版／大日本図書、1994.2.1FDD版）を使用しての比較を試みたものが、[図⑤]である。

比較は、JIS X208 内で記述されるもののみを対象としたが、それとても『芸文類聚』に使用される分類概念語彙の 24 % が一致することが判明した。

このことは、古典学のオントロジが決して現代と疎遠なものではなく、現代においても有効に活用し得る可能性を示すものである。

しかも、『芸文類聚』に一致する『分類語彙表』の上位概念を見ると、1.2 ～ 1.5 の分野、すなわち「人間」と「自然」に関する語彙に集中している。

このことは、古典的語彙が人間・自然に親近的な部分でさまざまに発生し、それゆえにこそ、現代にまでその命脈を保ち得たと考えることができよう。

芸文類聚の件数	芸文類聚と分類語彙との比較	分類語彙の件数
728	全件数	36,780
	内平仮名または片仮名文字列を含む	14,559
45	内UCS文字化け	5
683	全部が漢字列表記のもの（有効件数）	22,216
27	部の一致数	27
166	門の一致数	166
166	部または門のべ一致数	166
24%	一致率	

巻	上位概念比較の内訳 部の名前	下位語数
第六巻	州	1
第十一巻	帝王	3
第四十四巻	楽	1
第六十七巻	衣冠	1
第八十二巻	草	1
第八十四巻	宝玉	1
第八十九巻	木	5
第九十巻	鳥	7
第九十三巻	獸	7
	計	27

[図⑤] 『芸文類聚』と『分類語彙表』の比較

12. おわりに—文学研究と情報学のパラダイム—

文学研究においても、情報機器の利用は、"普

及"から"必須"の段階へと推移しつつある。その理由として、一つには、文学の存在基盤たる様々な事象・素材・歴史的動向などを把握・分析するために、その周縁資料の整備・分析作業も、文学研究のためには等価的に不可欠であることの認識がようやく一般化し、多方面で深化した研究が進められていることがまず挙げられる。また、従来"文学作品"として認知されてきた作品の存在意義・価値自体も、歴史的に見れば、その享受の時々における評価活動と不可分で、現代における「古典」自体も、そうした淘汰から免れ得ない一過的現象にすぎないことも数多く立証されて来たことも無縁ではなかろう。

とりわけ、古典世界の学問というのは、「従来の縦割・ジャンル別の重圧の下に身をひそめていた緇徒が、思わざる方面に活躍し、当然のことながら幅広く学問を修めていたことが知られる^{*10}。」ことも少なくなく、現代とは異なる発想で以て、存外洗練された体系を形成しており、それを文芸偏重の考え方で一面的に切り取ってしまうと、対象となる注釈・学問の世界が非常に矮小化されてしまい、その本質を見えなくしてしまう危険性があるものである^{*11}。

その結果、視野の拡大・相対化、聖典化意識の再検証、情報量の肥大化を促すことになる。

文学研究の場においても、研究のために多様な情報世界を如何に情報学研究位置付けはどのようなものであろうか。

多くの人は、ツールとしての情報機器を使いこなすための手段を生み出すための補助的な存在に止まるものと考えている。

こうした動向には、現在の所、データ蓄積や検索作業を通じて、それぞれの分野における知見を得ようとする方向に向うものが多い。

この事を決して非難するものではないが、こうした作業は、極言すれば、その手法自体には何ら新規の意匠は見あたらず、単なる素材の変化にとどまり、ある意味で、行き詰まり感も感じ始めていたことは否めない。

本稿は、そうした状況に鑑み、情報学的発想を文学的に援用することの一つの試みでもある。や

や観念的に過ぎるきらいもあったかもしれぬが、
本稿の執筆を通じて、「古典」というものの資源

的価値と、その可能性を改めて痛感した次第である。

*1 ○田窪直規「図書館情報学分野の分類法—その 20 世紀を振り返り、21 世紀を展望する—」（論集・図書館情報学研究の歩み 第 20 集『21 世紀の図書館と図書館員』（日本図書館情報学会研究委員会：編、日外アソシエーツ：発行／紀伊国屋書店：発売、2001.1.26））

*2 ○田窪直規「電子図書館から電子メディア空間へ、そしてその意味するところ」（『人文学と情報処理』9,勉誠出版,1991,p23-30）

*3 たとえば、唐・李瀚『蒙求』の最終四句は著名。「浩々^{つぶ}万古。不可備甄^{しる}。（浩々たる万古。備さに甄すべからず。）芟煩^か？華^{くわ}。爾曹勉旃^と。（煩を^{なんぢ}を^{ともがら}を^{これ}を^{めよ}。）」と述べ、歴代万巻の書を見て記すことさえ困難な状況を鑑み、煩瑣なものを取り除き、精華を記したから、これを学ぶことを努めよという。これは、多くの典籍から枢要な知識を精選してまとめた幼学書に代表的な言だが、同じコンセプトでまとめられた古代的百科全書とでもいべき多くの類聚編纂物でも述べられることである。

*4 ○顧力仁『永楽大典及其輯佚書研究』（文史哲学集成 129, 文史哲出版社, 1985.7）

○相田満「『永楽大典』収載の『蒙求』一群の書について—明代初期における『蒙求』受容史管見—」（『国文学研究資料館紀要』20,pp403-424,1994.3.25）

*5 八代国治『吾妻鏡の研究』（明世堂書店、1941.11 修正再版）（藝林舎、1976 復刻版）

*6 相田満「河海抄の作られ方—『職原抄』引用から見える問題を中心に—」（国文学研究資料館紀要 26/国文学研究資料館/pp161-222,2000.3.29）

*7 山岡俊明『類聚名物考』巻二百六十九書籍部第七（井上頼圀・近藤瓶城：校訂『類聚名物考』（五）、歴史図書社、1974.6.28）。句読点は稿者による。

*8 武田雅哉『蒼頡たちの宴』（ちくま学芸文庫、タ 1 4－1, 筑摩書房, 1998.5.8）

*9 Collins, A.M., & Quillian, M.R. 1969 Retrieval time from semantic memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 8, 240-247

*10 牧野和夫「釈家を中心とした注釈（学問）と文学の交渉の一端—中世注釈研究の動向と展望—」（中世文学会・編『中世文学研究の三十年』、昭六十・十）【「注釈」は学問の一環である。当時の学問の常として、内外典の書写という行為を避けて通ることはできない。注釈書・伝記類の撰述者・書写者を、他の書物の書写奥書にたどるとき、従来の縦割・ジャンル別の重圧の下に身をひそめていた緇徒が、思わざる方面に活躍し、当然のことながら幅広く学問を修めていたことが知られるのである。今は無名に等しい僧俗が、想外に大きな功績を残していることもある。】

*11 相田満「注釈学（シンポジウム／中世説話の〈意味〉）」（叢書日本語の文化史 1『中世説話の〈意味〉』/笠間書院/pp57-72(16)